

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆家	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
危	キ あぶない あやうい あやぶむ		𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	杜家立成
危			𠂔	𠂔			𠂔	𠂔	豐替指歸
			𠂔	𠂔			𠂔	𠂔	
却	キヤク かえって しりぞく しりぞける		𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	王勃詩序
卻			𠂔	𠂔			𠂔	𠂔	
			𠂔	𠂔			𠂔	𠂔	
即	ソク すなわち たどえ つく もし		𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	王勃詩序
卽			𠂔	𠂔			𠂔	𠂔	
			𠂔	𠂔			𠂔	𠂔	
			𠂔	𠂔			𠂔	𠂔	
卵	ラン たまご		𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	家隸萬象名義
			𠂔	𠂔			𠂔	𠂔	類聚古集位
卸	シヤ おろし おろす		𠂔	𠂔			𠂔	𠂔	王勃詩序
			𠂔	𠂔			𠂔	𠂔	

【却】「卻」の異体字で五経文字や康熙字典では俗字とされているがその出現は早く、漢代にまでさかのぼる。文部省活字も俗字を採用している。旁を「𠂔」と誤ったものが多い。
【即】漢代の隸省／隸変である。康熙字典には「即今作即」とある。文部省活字もこの字体を採用している。漱石は正統字

体と通字の折衷のような字体を書いている。
【卵】大徐本に古文は見えず、段注本に見える。宋代の大徐本や清代の段注本よりも古い唐代に作られた九経字様に説文に従う字体として、段注本の古文にあたる字体があるということとは、古い説文には古文の字体が掲載されていたのだろう。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
危	危	危	危	危	危		危	危	危	危		危
危	危				危							
却	却	却	却	却	却		却	却	却	却		却
即	即	即	即	即	即		即	即	即	即		即
卵	卵	卵	卵	卵	卵		卵	卵	卵	卵		卵
卸	卸	卸	卸	卸	卸		卸	卸	卸	卸		卸

段注本の古文は望山楚簡や馬王堆2と字体が合致する。
【卸】江戸干禄では、偏を「垂」としたものを〈正〉とし、「𠂔」とするものを〈通〉としているが、五経文字では、「卸」を正字として修正している。驚くべきことに漱石は江戸干禄に掲載のものと同じ2種の字体を書いている。漱石は干禄字

書を持っていたのかもしれない。
※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆家	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期						
卿	キョウ ケイ 人①		睡虎地秦簡	大徐・卯部	馬王堆	乙瑛碑	十七帖	東方朔画贊	鄭義下碑	九成宮	干祿・序	王勃詩序			
卿			郭店楚簡	段注・卯部	居延漢簡	史晨前碑		王羲之草	泉男生墓誌	五經・日部(伏節)		聶聶指歸			
卿					居延漢簡	張遷碑			李寿墓誌	五經・日部(石經)					
						敦熒漢簡									
厄	ヤク わざわい 常①		睡虎地秦簡	大徐・日部			集字聖教序		度人經	五經・日部(伏節)		寶墨經斷簡			
										五經・日部(隸初)					
厚	コウ あつい 教5常①		甲骨	金文	大徐・早部	馬王堆	史晨前碑	十七帖	集字聖教序	元祐墓誌	温彦博碑	杜家立成			
			金文	金文	望山楚簡	大徐・早部	居延漢簡	西狭頌		王遷墓誌	伊闕仏龕碑	杜家立成			
			金文	金文	望山楚簡	大徐・古文	銀雀山竹簡	熹平石經		于志寧碑		篆隸萬象名義			
厘	リン 常①		郭店楚簡	大徐・里部							江戸干祿				
塵	テン みせ やしき								埤通字図銘	陸紹墓誌	江戸干祿(彫)	聶聶指歸			
									埤通字図銘	陸紹墓誌	五經・尸部				
釐	リ おさめる		金文	金文	郭店楚簡	大徐・里部			王舍人碑	宋捐祖石經帖	集字聖教序	檀資墓誌	雁塔聖教序	江戸干祿	篆隸萬象名義
			金文	金文									釐		

【卿】大徐の大徐本には「從卯」とあるが、段注本には「從卯」とある。大徐本や段注本より古い五経文字の「大徐」の字体には「尸」の中に点がある。もしかしたら古い大徐には「尸」の中に点があったのかもしれない。

【厄】大徐の大徐本や段注本より古い五経文字の尸部に「尸」

に従う字体があり「大徐」とあるが、大徐本にも段注本にもない。もしかしたら古い大徐には「尸」に従う字が載っていたのかもしれない。

【厘】「厘」「塵」「釐」が同字種の異体字なのか、別字なのか。古代には「厘」にあたる字体は見えない。王羲之が宋捐祖石

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
卿	卿	卿	卿		卿		卿					卿 現代中国
卿	卿				卿							
					卿							
厄	厄	厄	厄	厄			厄					厄 現代中国
	厄			厄								
厚	厚	厚	厚	厚			厚	厚		厚	厚	厚 現代中国
				厚								
				厚								
				厚								
厘	厘	厘	厘	厘	厘		厘	厘		厘	厘	厘 現代中国
				厘								
				厘								
				厘								
釐	釐	釐	釐	釐	釐		釐					釐 江戸干祿(彫)
				釐								
				釐								

緯帖で草書の「釐」を書いているが、字体は「厘」のようなので、「釐」の草書から「厘」ができたと考えられることもできる。北魏では「塵」の字種に「土+厘」を書いたり、「厘」を書いたりしている。官板干祿字書では「厘」と「塵」を同字種、「釐」は別字としている。康熙字典は「厘」の項に「俗作

釐省非」とある。漢字要覧では「物ノ数量ヲ記スル時ニ限リテ、別體ヲ用キルモ妨ナシ」とし「厘」は「釐」の異体字の特別な用法とする。明治の漢字は「厘」を「釐」の許容とする。陸軍幼年学校用事便覧は「實ハ別字」とする。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
原	ゲン はら たずねる もと								元暦萬葉① 江戸千祿 王勃詩序
原									
厩	キュウ うまや								元暦萬葉① 節用
厩									
厩									
厨	ズ チュウ くりや								元暦萬葉① 江戸千祿
厨									
厭	エン オン ヨウ あきる いとう								元暦萬葉① 節用
厭									

【原】大徐にある「厂+泉泉」の字体の例が見つからない。古代の文字を見ると〈泉〉に角(つ)のはついていない。角をつけるのは字体の差ではなく、大徐の様式の差なのではないだろうか。干祿字書では角ありを〈正〉、角なしを〈俗〉とする。五経文字に異体字があり、

【厩】この字は元々「广」の字らしい。説文を根拠とすれば五経文字の字体が正字ということになるだろう。文部省活字は干祿字書でいう〈俗〉を採用している。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
原	原	原	原				原	原	原	原	原	原
原	原	原										原
原	原											
原												
原												
厩	厩	厩	厩				厩	厩				厩
厩	厩	厩										厩
厩												
厨	厨	厨	厨				厨	厨				厨
厨	厨	厨										厨
厭	厭	厭	厭	厭			厭	厭				厭
厭	厭	厭										厭

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆書	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
嚴	ゲン ゴン おごそか まびしい								経6常①
嚴	人②								王勃詩序
嚴									杜家立成
嚴									聶晉指歸
去	キョ せる								王勃詩序
去									
參	サン まじわる みつ								王勃詩序
參	②								聖武天皇雜集
參									
參									
又	ユウ また								王勃詩序
又	常①								
又									關亭叙
又	サ シャ また								弘徽御勅成弘経

【又】金文には「右」という意味で「又」を用いている例があり、古璽には「有」という意味で「又」を用いている例があるという。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
嚴												严 現代中国
嚴												
嚴												
嚴												
去												去 現代中国
去												
參												参 現代中国
參												
參												
參												
又												又 現代中国
又												
又												
又												又 現代中国

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆書	隷書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
及	キユウ および およぼす								王勃詩序
及									風信帖
双	ソウ ふた ならぶ ふたつ								王勃詩序
雙									大聖武
反	ハン タン ホン そらす そる								王勃詩序
	かえす かえる								
友	ユウ とも								王勃詩序
									杜家立成
									鄭晉指歸

【双】上代にアメカンムリに作る字がある。平安時代に小野道風が屏風土台で2種の字体を使っている。江戸期以降は「雙」よりも「双」の方が隆盛。弘道軒四号には「双」だけがあり、「雙」がない。弘道軒三号には「雙」がある。

【友】1字に2カ所の右払いがある張猛龍碑は例外中の例外。

甲骨①や毛公鼎を楷書にすると「双」と字体が衝突する。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
及	及	及	及	及			及	及	及	及		及 現代中国
及		弓										
		遼										
雙	雙	双	双	双	双		双	双	双	双	雙	双 干祿(俗) 現代中国
雙		雙	雙				雙(雙)				霽	
反	反	反	反	反	反		反	反	反	反		反 現代中国
		反										
友	友	友	友	友	友		友	友	友	友	友	友 干祿(俗) 現代中国
友		友										
		習										
		犂										
		習										